

## 〈紹介〉

松本寧至 監修

# 『日本文学の創造と展開』を推す

青山 忠 一

松本寧至名誉教授の古稀記念論文集として発刊された『日本文学の創造と展開・古典編・近現代編』の二冊は、二松学舎大学大学院国文学研究科が総力をあげ、現在の二松学舎の学問水準のありようを内外に示す好個の記念碑である。

何を措いてもこの企画を立案し達成した松本教授の学者としての矜持と、教師としての意欲に敬意を表する。三年以前古稀を迎えた小生は、自らの学問的決算報告書を纏めたい、との一念に汲々として、教育実績を世に問おうとか、教え子後輩諸氏に発表の機会を与えよう、忤と云う配慮や発想には思い到らなかったのだ。仏門ではこうした営為を自利行と呼び、小乗と貶めている。他を扶益する行為を利他行と称し、大乘と誉めるのである。その意味でも松本博士は正に摩訶衍大乘を実践する菩薩の行者と云うべきであろう。

松本先生はすでに古稀記念論文集として『日本古典文学の仏教的研究』を上梓されているので、本書では監修者のお立場で、編集の実務は専ら古典篇は望月郁子教授、近現代篇は今西幹一教授にお任せになり乍らも、「中世文学難語考」と『龍』昇る」の二編をそれぞれに執筆されているだからそのご健筆振りにはただく叩頭頓首

である。

古典編は序文を雨海博洋元学長から頂き、望月邦子教授の序文及び「源氏物語蜻蛉巻を読む」を巻頭に、綾部宏行、児玉里麻、池田寛子、下浅千穂、難波宏彰、中川聡、児玉喜恵子、田中栄一郎、岡田純枝、松本寧至と云う二松学舎大学大学院の博士学位取得者、満期退学者、在籍者の中から選ばれた力作が並ぶのである。

近現代編は第一の序文を元二松学舎大学教授剣持武彦氏から賜わり、第二のそれを前副学長今西幹一教授に仰いでいる。冒頭に今西博士の「芥川龍之介『河童』の文芸構造」を据え、町泉寿郎、及川和憲、小野塚力、早川友規、田村嘉勝、奴田原論、望月芳哲、関根美穂、児玉喜恵子、と言う、陣容で、松本教授の『龍』昇る」が締め括るのである。

両編共に新人若手の執筆が多いだけに、多少の不備や疑義を指摘し得ぬわけではないが、その各々に漲る意欲と誠実がひし／＼と迫って来て快いものがある。望月教授をはじめとする編集委員会の審査が厳格を極め、作品の一編ごとに吟味検討が加えられ、筆者に何度も書き改めや修正を迫ったと云う。中には原稿用紙に涙の痕を止めていたとの話も仄聞した。

それらは若い諸君にとって自分の作品が活字になると云う晴れがましさと共に苦い思い出として記憶に残るであろうが、それを通らねば研究者としての将来はないことを銘記すべきであろう。こうした機会を与えて下さった松本教授に満腔の敬意を表したい。

(二松学舎大学名誉教授 文学博士)